

手袋を買いに 新美南吉

寒い冬が北方から、狐の親子の棲んでいる森へもやって来ました。

或朝洞穴から子供の狐が出ようと思いました、

「あっ」と叫んで眼を抑えながら母さん狐のところへころげて来ました。

「母ちゃん、眼に何か刺さった。ぬいてちょうだい。早く早く。」と言いました。

母さん狐がびっくりして、あわてふためきながら、眼を抑えている子供の手を恐る恐るとりのけて見ましたが、何も刺さってはいませんでした。母さん狐は洞穴の入口から外へ出て始めてわけがわかりました。昨夜のうち真白な雪がどっさり降ったのです。その雪の上からお陽さまがキラキラと照らしていたので、雪は眩しいほど反射していたのです。雪を知らなかった子供の狐は、あまり強い反射をうけたので、眼に何か刺さったと思ったのです。

子供の狐は遊びに行きました。真綿のように柔かい雪の上をかけ廻ると、雪の粉が、しぶきのように飛び散って小さい虹がすつと

映るうつのでした。

すると突然、うしろで、

「どたどた、ぎーっ」と物凄ものすごい音がして、パン粉こなゆきのような粉雪こなゆきが、ふわあっと子狐こぎつねにおつかぶさつて来ました。子狐はびっくりして、雪の中なかににころがるようにして十米メートルも向こうへ逃げました。何だろうと思つてふり返つて見ましたが、何もいませんでした。それ

は樅もみの枝から雪がなだれ落ちたのでした。まだ枝と枝の間から白い絹糸きぬのように雪がこぼれていました。

間もなく洞穴ほらあなへ帰つて来た子狐は、

「お母ちゃん、お手々が冷たい、お手々がちんちんする。」と言つて、濡ぬれて牡丹色ぼたんになった両手を母さん狐の前にさしました。

母さん狐は、その手に、はあっと息をふきかけて、ぬくとい母さんの手でやんわり包んでやりながら、

「もうすぐ暖あたたかくなるよ、雪をさわると、すぐ暖あたたかくなるもんだよ。」と言いましたが、かわいい坊やの手に霜しもやけができてはかあいそ

うだから、夜になったら、町まで行つて、坊やのお手々にあうような毛糸の手袋を買つてやろうと思ひました。

暗い暗い夜が風呂敷ふろしきのような影をひろげて野原や森を包みにやつて来ましたが、雪はあまり白いので、包んでも包んでも白く浮びあがつていました。

親子の銀狐ぎんぎつねは洞穴ほらあなから出ました。子供の方はお母さんのおなかの下へはいりこんで、そこからまんまるな眼をぱちぱちさせながら、あつちやこつちを見ながら歩いて行きました。

やがて、行手ゆくてにぼつたりあかりが一つ見え始めました。それを子供の狐が見つけて、

「母ちゃん、お星さまは、あんな低いところにも落ちてるのねえ。」とききました。

「あれはお星さまじゃないのよ。」と言って、そのとき母さん狐の足はすくんでしまいました。

「あれは町の灯ひなんだよ。」

その町の灯ひを見たとき、母さん狐は、あるとき町へお友達と出かけて行って、とんだ目にあつたことを思い出しました。およしなさいっていうのもきかないで、お友達の狐が、或る家あひるの家鴨あひるを盗もうとしたので、お百姓ひやくしやうさんに見つかって、さんざ追いまくられて、命からがら逃げたことでした。

「母ちゃん、何してんの。早く行こうよ。」と子供の狐がおなかの下から言うのですが、母さん狐はどうしても足がすすまないのでした。そこで、しかたがないので、坊やだけを一人で町まで行かせることになりました。

「坊や、お手々を片方お出し。」とお母さん狐が言いました。その手を、母さん狐はしばらく握っている間に、かわいい人間の子供の

手にしてしまいました。坊やの狐はその手をひろげたり、握ったり、抓つかって見たり、嗅かいで見たりしました。

「何だか変だな、母ちゃん、これなあに？」と言って、雪あかりに、又またその、人間の手に変えられてしまった自分の手をしげしげと見つめました。

「それは人間の手よ。いいかい坊や、町へ行ったらね、たくさん人間の家があるからね、まず表にまるいシャツポの看板のかかっている家を探すんだよ。それが見つかったらね、トントンと戸たを叩いて、今晚はって言うんだよ。そうするとね、中から人間が、すこやし戸をあけるからね、その戸の隙間すきまから、こっちの手、ほらこの人間の手をさし入れてね、この手にちょうどいい手袋ちょうだいって言うんだよ、わかったね、決して、こっちのお手々を出しちゃう駄目だめよ。」と母さん狐は言いきかせました。

「どうして？」と坊やの狐はききかえました。

「人間はね、相手が狐だとわかると、手袋を売ってくれないんだよ。それどころか、摺つかまえて檻おりの中へ入れちゃうんだよ、人間ってほんとに恐おそしいものなんだよ。」

「ふーん。」

「決して、こっちの手を出しちゃういけないよ、こっちの方、ほら人間の手の方をさしだすんだよ。」と言って、母さんの狐は、持って

来た二つの白銅貨はくどうかを、人間の手の方へ握らせてやりました。

子供の狐は、町の灯ひを目あてに、雪あかりの野原をよちよちやって行きました。始めのうちは一つきりだった灯ひが二つになり三つになり、はては十にもふえました。狐の子供はそれを見て、灯ひには、星と同じように、赤いのや黄いのや青いのがあるんだなと思いました。やがて町にはいりましたが、通りの家々はもうみんな戸を閉めてしまつて、高い窓から暖かそうな光が、道の雪の上に落ちているばかりでした。

けれど表の看板の上には大たいい小さな電燈でんとうがともっていましたので、狐の子は、それを見ながら、帽子屋を探して行きました。自転車の看板や、眼鏡の看板やその他いろんな看板が、あるものは、新しいペンキで画えがかれ、或るものは、古い壁のようにはげていましたが、町に始めて出て来た子狐には、それらのものが、いったい何であるか分らないのでした。

とうとう帽子屋がみつかりました。お母さんが道々よく教えてくれた、黒い大きなシルクハットの帽子の看板が、青い電燈に照らされてかかっていました。

子狐は教えられた通り、トントンと戸を叩きました。

「今晚は。」

すると、中では何かこと音かしていましたがやがて、戸が一寸ほどゴロリとあいて、光の帯が道の白い雪の上に長く伸びました。

子狐は、その光がまばゆかったので、めんくらって、まちがった方の手を、——お母さまが出しちゃいけないと言ってよく聞かせた方の手を、隙間からさしこんでしまいました。

「このお手々にちようどいい手袋下さい。」

すると帽子屋さんは、おやおやと思いました。狐の手です。狐の手が手袋をくれと言うのです。これはきつと木の葉で買いに来たんだなと思いました。そこで、

「先にお金を下さい。」と言いました。子狐はすなおに、握って来た白銅貨を二つ帽子屋さんに渡しました。帽子屋さんはそれを人差指のさきにつけて、カチ合せて見ると、チンチンとよい音がしましたので、これは木の葉じゃない、ほんのお金だと思いましたので、柵から子供用の糸の手袋をとり出して来て、子狐の手に持たせてやりました。子狐は、お礼を言って又、もと来た道を帰り始めました。

「お母さんは、人間は恐いものだっておっしゃったが、ちつとも恐くないや。だって僕の手を見ても、どうもしなかったもの。」
と思いました。けれど子狐はいったい人間なんてどんなものか見たいと思いました。

ある窓の下を通りかかると、人間の声がありました。何と云うやさしい、何と云う美しい、何と云うおっとりした声なんでしょう。

「ねむれ ねむれ

母の胸に、

ねむれ ねむれ

母の手に——。」

子狐はその唄声は、きっと人間のお母さんの声にちがいないと思いました。だって、子狐が眠る時にも、やっぱり母さん狐は、あんなやさしい声でゆすぶってくれるからです。

するとこんどは、子供の声がしました。

「母ちゃん、こんな寒い夜は、森の子狐は寒い寒いって啼ないてるでしょうね。」

すると母さんの声が、

「森の子狐もお母さん狐のお唄をきいて、洞穴ほらあなの中で眠ろうとしているでしょうね。さあ坊やも早くねんねしなさい。森の子狐と坊やとどっちが早くねんねするか、きっと坊やの方が早くねんねしますよ。」

それをきくと子狐は急にお母さんが恋しくなって、お母さん狐の待っている方へ跳んで行きました。

お母さん狐は、心配しながら、坊やの狐の帰って来るのを、今か今かとふるえながら待っていましたので、坊やが来ると、暖かい胸に抱きしめて泣きたいほどよろこびました。

二匹の狐は森の方へ帰って行きました。月が出たので、狐の毛なみが銀色に光り、その足あとには、コバルトの影がたまりました。

「母ちゃん、人間ってちつとも恐くないや。」

「どうして?」

「坊、間違えてほんとうのお手々出しちゃったの。でも帽子屋さん、掴まえやしなかったもの。ちゃんとこない暖い手袋くれたもの。」

と言って手袋のはまった両手をパンパンやって見せました。お母さん狐は、

「まあ!」とあきれましたが、「ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに人間はいいものかしら。」とつぶやきました。